京都府立大学学術報告(人文・社会)第52号 (2000年12月)

交錯する十字架
── ジョン・ダンの宗教詩の一断面：'The Crosse'の場合 ──

岡　村　眞紀子

ジョン・ダン (John Donne) の宗教詩は，ほぼ1608年頃から1620年頃に書かれている。1601年，ダンはそのもとで議員職を得ていたトマス・エジャトン (Thomas Egerton) の姪アン (Anne) と秘密結婚し，エジャトンの怒りをかって失職した。1606年には新居をミッチャム (Mitcham) に設けたが，そこでの生活は悲惨なもので，彼はそこを「病院(hospital)」，「牢獄(prison)」などと呼んだ。(1) 1607年にはグロスターの主席司祭トマス・モートン (Thomas Morton) が勧めた聖職を，汚れた我が身がそれにふさわしくないからとして断っている。

> ... some irregularities of my life have been so visible to some men, that though I have, I thank God, made my peace with Him by penitential resolutions against them, and, by the assistance of His grace, banished them my affections: yet this, which God knows to be so, is not so visible to men, as to free me from their censures, and, it may be, that sacred calling from a dishonour.(2)

それから8年後，ダンは聖ポール寺院の司祭となった。彼の宗教詩は，ほぼこの間に書かれたもので，「Jack Donne (俗人ダン)」から「Dr. Donne (司祭ダン)」への変遷を表すものと評されることが多い。しかし，ダンの宗教詩は神学的関心と芸術的関心をあわせもって書かれたもので，神学関心についても他を啓発するためではなく，内省的なもの，それゆえに神へではなく自己に呼びかけるものである，というP. M. オリバー (P. M. Oliver) のことばは妥当であろう。(3) アイザック・ウォールトン (Izaak Walton) の世俗の詩 (恋愛詩や諷刺詩) と宗教詩の詩作時期を明確に分ける見方(4)に対し，ヘレン・ガードナー (Helen Gardner) は「Jack Donne」から「Dr. Donne」への変化はきわめて徐々に現れたもので，ダンの本質であるwit (才気) は宗教詩においても，多少抑えられた形ではあっても変わっていない，と述べている。(5)

ところで，ガードナーが編集した *Devine Poems* のなかでOccasional Poemsとしてまとめている何篇かの詩がある。文字どおり，何らかの場合に際して作られた詩篇であるが，'The Crosse'(「十字架」) は例外的で，むしろ書簡詩 (verse letters) に入れた方がいいのではない

かとガードナーは言っている。そのスタイルや，この詩の原稿が多くの人に回っていることから創られた時期も他の occasional poems より早い時期のものと考えているのである。(6) 1603年にピューリタンが千年王国請願（Millenary Petition）を提出して，洗礼時に十字を切ることや十字架像を用いることの廃止を申し入れた。翌1604年，ジェームズ1世（James I）はハンプトン・コート会議（Hampton Court Conference）でこれを拒否した。が，このころ，ダンは *Biathanatos*（『自殺論』）や *Pseudo-Martyre*（『偽殉教者』）の執筆に取りかかっていて，彼の内面深くに神学問題があったことは否めない。もっとも，それもオリバーが言うように，彼自身の問題としてではあるが。ピューリタンと英国国教会，またさらにそれらとカトリックとの確執は，時代においてとともに個人の内面においても，小さからざる問題で，ダンとて例外ではなかった。ウィリアム・バーロウ（William Barlow）の *Summe and Substance of the Conference*（『ハンプトン・コート会議の骨子と要旨』）への書き込みが残っているなど，ダンはこの議論に多大の関心を抱き，canon law（教会法）研究も重ねていたらしい。(7)

明らかに 'The Crosse'は，この事実を契機として書かれたもので，そういう意味ではまさに occasional poems の1つといえる。(8) しかし，ただそれのみならず，一目で読者はこの詩がきわめてダンらしい修辞的な詩であることを見てとるであろう。64行の詩行のなかに 'crosse' または 'crosses' なる語が29回，'crossed' や 'crossing' も含めると32回も使われているのであるから。'cross' は *Oxford English Dictionary* でも31の字義を与えられているが，その字義の多様性がこの詩を成立させている。オリバーが言う神学的関心同様，芸術的関心からの詩作であることは，ただこのことからだけでも伺える。

'The Crosse' はいきなり 'dare I / …, th'image of his Crosse deny?'（キリスト架刑像を拒むことなどとうていできない）(ll.1-2) と始まる。まさにピューリタンの請願に真っ向から立ち向かう議論を歌おうとするかのごとくである。その根拠は，キリストが十字架の刑の苦しみを受け容れたのだからということと，人である自分は神の姿（image），キリストの姿（image）で創られたものだから，ということである。

Since Christ embrac'd the Crosse it selfe, dare I
His image, th'image of his Crosse deny?

［キリストが十字架の刑を受け容れられたのだから，
キリストの像に形取って創られた私が，どうしてその十字架の像を
拒むことなどできようか？］

(1-2)

最初の 'the Crosse' は 'crucifiction'（十字架の刑）であり，つぎの 'his cross' は 'crucifiction' と 'affliction'（苦悩）を意味し，それぞれに 'the' や 'his' が付加されて，なおその意義を峻別する。ピューリタンはとくに 'image'（画像や彫像）を拒否し，このときの請願でもキリ

スト像を用いることや，手で十字を切ることの廃止を提出している。それらを意味する‘crosse’をもそこここで使いつつ，ここでは敢えて‘image’なる語を使い，人間が神の姿に創られたという聖書に依拠して(9)ピューリタンの請願を否定している。ピューリタンが聖書をその信仰の根拠とするがゆえの詩行である。しかも，つづく詩行で，敢えて‘sacrifice’（犠牲），‘Altar’（祭壇）とカトリックに強く結びつくことばでもって，その説を論破しようとしている。さらに，ここでの‘sacrifice’はキリストの受難，まさに‘cross’を意味しているのだから巧みである。‘Altar’や‘sacrifice’などといった語を使いつつ，ピューリタンの請願を‘Pulpit’（説教台）での説教好きのピューリタンが‘mis-grounded law’（根拠のない法）を求めるものだと斥け，その主張も英国国教会を‘scandall’レベルで避難しているのみと，淡々と，しかも痛烈に拒絶する。

It bore all other sinnes, but is it fit
That it should beare the sinne of scorning it?

［この十字架はすべてを背負っている。
さらに十字架をないがしろにするという罪を背負うなどということがあっていいものだろうか。］

(5-6)

キリストは人のすべての罪を背負って架刑を受け，それを贖った。‘bear’はいうまでもなく罪を「背負い」，十字架を「背負って」架刑を受け，その苦しみに「耐えた」と，三重の意味をもたせている。「キリスト」，「十字架」，「苦しみ」のすべてが‘It’（‘Crosse’）の一語に収約され，そのすべての意味を背負った‘Crosse’を軽視することはあってはならない，それはさらなる罪で，すべての罪を背負ったというからにはそれ以上の罪を背負うことなどはありえない。さらに，「キリスト」（the picture（キリスト像））の「苦しみ」（his pain）は軽視できず，眼を逸らせもできないし逃げもできないのだから，その意味での‘Crosse’は軽視できず，眼を逸らせもできない。巧みな論理の結論は次のようである。

for, the losse
Of this Crosse, were to mee another Crosse;

［この十字架を失うことは，私には別の十字架を背負うことなのだから。］

(11-12)

十字架を手放して祈りの時にも十字架を扱わないこと，十字架に祈りや信仰を捧げないことは，キリストの苦悩から眼をそらすことでさらなる罪となり，さらなる苦悩となる。苦悩が「ない」

ことは，苦悩が「極度に大きい」ことで，苦悩が「ない」ことは一見「良い」ことのようだが，それだけ「悪い」ことである。'no' は 'extreme' であり，'better' は 'worse' であるとはダンらしいパラドックスである。

Better were worse, for, no affliction,
No Crosse is so extreme, as to have none.
［より良いことはより悪いこと，なぜなら十字架をもたず，
苦悩がないことほど大きな苦悩の極みはないのだから。］
(13-14)

また，

Who can blot out the Crosse, which th'instrument
Of God, dew'd on mee in the Sacrament?
［神の御業の道具でもあるキリストが，秘蹟のときに
私のうえに授けたもうた十字架を誰が無にできるというのか。］
(15-16)

ここでもまた，'Sacrament'（カトリックでは「秘蹟」，プロテスタントでは洗礼や聖餐をさす「礼典」）なる語の使用で，カトリックを批判するプロテスタントを説得する。ここでの 'Crosse' は「キリストの架刑」つまり「贖罪」で，それは神の意志の計画のなかのことだというのだというのである。

つづく何行かは神の被造物がいかに「十字架の形」で満ちているかを歌う。泳ぐ人の姿，空飛ぶ鳥，海ゆく帆船，そして地球そのものも経線と緯線の「十字」でできていると。(19-24) ゆえに，自らが自らの十字架となるべきなのである。地球の成りたちに思いが至るとダンらしさはいよいよ発揮され，錬金術へ，医学へ化学へと想像力は馳せる。と同時に古典芸術へも向かう。この世のすべては，'materiall Crosse'（物質的な十字架，十字で構成されたもの）で，そこには 'spiritual (Crosses)'（精神的な十字架，十字架刑を受けたキリスト）があり，贖罪と苦悩がある。それゆえに，'Cross' には当時の最新の化学的抽出による薬よりも人を癒す力をもち，人の本来の姿を維持させ，堕落から護る力がある。そこでは人が自らの「十字架」であって，自らの苦悩で自らを蒸留し浄化することができる。(25-30) 最新の科学的化学は錬金術に等しいのである。一方，「十字架像」は，十字架にキリスト像を彫るのではなく，「十字架」に内在するキリストを彫り出すものである。(33-6) ここでは，彫刻家の仕事は内在するものを覆い隠しているものを取り除くことだとのミケランジェロ (Michelangelo) の思想が底辺にある。ダンのなかでの古代，中世のもつ近代性，近代の基の古代性，中世性がここに見られる。

錬金術は科学でもあり，またときには偽金造幣でもある。そこに象徴される17世紀の中世性と近代性のパラドックスは，人のもつ本来的パラドックスでもある。

But, as oft Alchimists doe coyners prove,
So may a selfe-dispising, get selfe-love,
And then as worst surfets, of best meates bee,
Soe is pride, issued from humility,

しかし，錬金術師が，ときとして偽金造であったりするように，
自己軽蔑は自己愛になることもある。
そして，大変なご馳走が，非常な腹痛のもととなるように，
謙遜から奢りが生まれるものなのだ。

(37-40)

だから——

therefore Crosse
Your joy in crosses, else, 'tis double losse.

ゆえに十字架の愉しみを
調べ，抑制せよ。でなければ二重の喪失になるのだから。

(41-2)

ここでの最初の 'Crosse' は動詞で，「調べる，抑制する」の意で 'crosses'（さまざまの十字架）を徒らに尊重しすぎないよう調べて抑制しなければならない，という。「自らの十字架」に意味を問わずして，「十字架」のみを過度に慈しんだり，「苦悩」を内在する歓びに耽ったり，十字架を敬うあまり独善的になったり，苦悩のなかで自己蔑視から自己愛に溺れたりと，何重もの罪に陥っていくからである。'crosses' が小文字で始まる複数形になっていることから，詩の前半に歌われたあらゆる意味におけるキリスト教とのかかわりでの 'Crosse' のみならず，一般的意味での 'crosse'（苦悩，十字形のもの，クロスするもの）を意味し，つぎの 'crosse thy senses'（43）（五感を調べ，抑制すべし），'And crosse thy heart'（51）（さらには，心臓と心を調べ，抑制せよ）につながっていく。五感の喜ぶものばかりを求めていてはならない。悪のもたらす 'crosses'（罪，それを贖う苦悩）を拒否してはならないのである。もちろん，'heart' は「心臓」と「心」の二重の意味をもつが，先の薬学同様，ここでも解剖学的医学の始まりが下敷きとなる。「心臓」は下向きにとがった形をして，動悸を打っている，とはまさに17世紀の最新の知である。それはまた，「心」が地獄に向いて，不安に揺れているありようでもある。(10) 人は己の限界をわきまえず，神の高みを望んだりもするが，そうして地獄に向かうとき，その 'dejec-

tion'（心の落ち込み）をもよく 'crosse'（調べ，抑制）しなければならない。上に向かうとき，それは下に向かうことだというパラドックスも，本来的に人に属するものであり，キリスト教的パラドックスでもある。

さらに解剖学的イメージが続く。'sutrus'（頭蓋骨の縫合線）の十字である。この割れ目を通じて脳は気を発散していると考えられていた。脳が働くとき，'concupiscence of witt'（人の知への欲望）も 'crosse'（調べ，抑制）せねばならない。(55-58) 'witt'（知）はダンにとっても時代にとっても，その文化にとってももっとも大切なものであるが，人がその限界を越えて淫らなまでに求めたとき，それは大罪になるのである。

ここで，詩は最初の主題に戻る。

Be covetous of Crosses , let none fall.
（十字架の数々を貪欲に求めよ。ひとつとて見落としてはならぬ。）
(59)

ピューリタンの請願に真っ向から立ち向かう１行である。つづく最終行はつぎのようである。

Crosse no man else, but crosse thy selfe in all.
Then doth the Crosse of Christ worke fruitfully
Within our hearts, when wee love harmlessly
That Crosses pictures much, and with more care
That Crosses children, which our Crosses are.
[他の誰でもない，何よりも己自身をよく調べ抑制せよ。
そうすれば，キリストの受難を秘めたキリスト像がわれらが心の中で
その意味を発揮し，われらはなんの罪を犯すこともなく
かの十字架像をこよなく愛し，さらなる思いをこめて
かのキリストの贖罪の十字架から生まれたすべてのものを
愛することができるのだ。それはわれら自身の十字架に他ならないのだから。]
(60-64)

'Crosse'（十字架）たる自らを 'crosse'（調べる）ことで，内在する罪の苦悩を露わにし，罪を贖ったキリストの死を見つめ，地獄に向かう心も信仰深く生かせるからだ。それは 'Crosses picture'（十字架像）を愛することで，それは神に背いたいかなる罪を犯しているわけでもなく，'Crosses children'（キリストの受難の十字架から生まれ出た子どもの十字架）をキリスト像にもまして心を致して愛することである。60行あまりを費やして歌ってきたすべての交錯する十字架，十字形は，外面的にも，内面的にも十字架である人間自身に帰結していく。内面の十字架を抱きしめ，慈しみ，その己を愛することは罪の苦悩を抱き，苦しみ，魂の浄化へと勤しむことで

ある。

ところで，同じ頃もう1篇の 'The Crosse' が書かれていて，この2篇はよく比較される。ジョージ・ハーバート（George Herbert）の 'The Crosse' である。ハーバートが1630年，ベマトンの教区牧師になってまもなく書かれたもので，ようやく神に尽くす聖職に就きながら，すぐれない健康も手伝って，その職責を果たせない苦しい内面を歌ったものである。2篇の詩は，内面的苦悩を歌っているという意味で類似したものであるが，ハーバートの方は，ストレートな内面をストレートにことばに変えている。

And then when after much delay,
Much wrastling, many a combate, this deare end,
So much desir' d, is giv' n, to take away
My power to serve thee; to unbend
All my abilities, my designes confound,
And lay my threatnings bleeding on the ground.

One ague dwelleth in my bones,
Another in my soul (the memorie
What I would do for thee, if once my grones
Could be allow' d for harmonie):
I am in all a weak disabled thing,
Save in the sight therteof, where strength doth sting.

それから，ずいぶん時間がかかったが，
あがき，苦しみ，あれほど求めてやまなかった
貴い目的が叶えられたのに，わが力を
奪い去ることが，神に尽くすことだとは。わが能力をみな，
萎えさせ，わがもくろみをうち挫き，
捧げしわが身を血にまみれしまま，地に放りおかれるとは。

一つの病はわが骨に
今ひとつの病はわが魂に巣食う。（去ることなき想いは
もし，わが呻きが妙なる調べとなりうるのならば，
汝，十字架のために私は何をすればよいのであろうか。）
我は弱き無能なるもの，
汝，十字架の御前になければ。御前にあればこそ力が与えられる。

(6-18)

ここでは，‘the crosse’はひとえに「十字架」であり，‘crosse’としてより‘thou’（‘thy’，‘thee’）と表現される。十字架に象徴されるキリストと父なる神への信仰が何より問題なのである。ただ最後近くに形容詞の‘crosse’（いじわるな）が使われて一ひねりがみられる。ダンの‘The Crosse’への意識もあるかもしれないが，ハーバートにおいては，それは中心的モチーフではない。また，社会的，政治的問題にも目は向けられていず，もっぱら内面的，精神的自己が問題である。

To have my aim, and yet to be
Farther from it then when I bent my bow;
To make my hopes my torture, and the fee
Of all my woes another wo,
Is in the midst of delicates to need,
And ev' n in Paradise to be a weed.

己の目的をもったのに，かつて弓を引いたときより
さらにその目的から遠ざかり，
わが希望を苦しみとし，すべての
苦悩の代償をさらなる苦悩とするのは
馳走のただ中で飢え，
天国にあってさえ意味なき雑草となること。

(25-30)

‘To make my hopes my torture /... / Is in the midst of delicates to need’と‘as worst surfets, of best meats bee; / Soe is pride, issued from humility’の2つの詩行は同じようにご馳走の比喩を使ってもその意味は随分と異なる。信仰を求めてやまないまっすぐなハーバートの心は求めても求めても自らの足りなさを知るのみで，苦痛がいや増す。一方ダンにとっては求めるべきものであればあるほどそこには危険も毒も孕まれている。外的世界においても内的世界においても，それが人の，また人の世の本質なのだから徹底して苦悩するしかない。‘wee love harmlessly / that Crosses pictures, much with more care, / That Crosses children, which our Crosses are’とのダンの締めくくりに対し，ハーバートの‘The Crosse’は次のように終わる。

And yet since these thy contradictions
Are properly a crosse felt by thy sonne,
With but foure words, my words, *Thy will be done.*

だが，これら矛盾は，汝の息子が，たった四語を
呟いて受け止めた十字架に他ならないなるゆえ，
われもただこの四語によるのみ。「汝の」「御心の」「なされん」「ことを」。
(33-36)

'Thy will be done' と 'which our Crosses are' の最後の4語の違いが二つの詩の違いを明確に表していて，その主題の違いがその詩形，詩行そのものも違いとなっている。ハーバートの詩が撞着性を内在する信仰の苦悩を神の導きのままに綴っているのに対し，ダンの詩はその内面の揺らぎと政治的テーマと内面的テーマの間の交錯が詩を紡いでいる。ハーバートは神に向かって歌い，ダンは自己に向かって歌うのである。

'The Crosse' はピューリタンの Millenary Petition をベースにして，それに反論するスタイルをとり，またその意図も秘めつつ，最後の一文に収斂されていく。さまざまな 'Crosses' を cross（交錯）させて縦横にことばを操っているダンの，さまざまな要素を cross（交錯）させる内面そのものがこの詩のテーマであり，それは中世と近代が cross（交叉）する17世紀の精神であるともいえるだろう。

註

(1) Gosse, Edmund, *The Life and Letters of John Donne, Dean of St. Paul's*(Vol.1), pp.187, 189
(2) *Ibid.*, p.159
(3) Oliver, P. M., *Donne's Religious Writing, A Discourse of Feigned Devotion*, pp.8-9
(4) Walton, Izaak, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, p. 32
(5) Gardner, Helen, *John Donne, The Divine Poems*, p.xvi
(6) *Ibid.*, p.92
(7) Gosse, *Loc cit.*, p.147
(8) Oliver, *Loc cit.*, p.67-8
ノーブルク（Norbrook）の「ダンは，ジェームズ1世の即位を祝う詩を書いていない」(Norbrook, David, 'The Monarchy of Wit and the Republic of Letters: Donne's Politics', in *Soliciting Interpretation: Literary Theory and Seventeenth-Century English Poetry*, ed. by Elizabeth D. Harvey and Katharine E. Maus, Chicago: Univ. of Chicago Pr., 1990）との見解を受けて，「この詩がジェームズ1世の新しい治世の訪れを祝う歌といえる」と述べている。そういう意味でも occasional poem といえる。
(9) *Genesis*, i, 26
(10) 'palpitation' は *OED* では，「心臓の動悸」の意味では1604年が初出であって，この詩の書かれた頃では新しい語であった。'A trembling or quivering motion; A tremble' の意味では1677年が初出となっているが，ここではその意味も含まれているように思われる。

テクスト

Grierson, Herbert J. C.(ed.), *The Poems of John Donne* (*OET*) (2 Vols.). Oxford: O.U.P., 1912. ダンの詩の引用はこのテクストによる。

Chambers, E. K.(ed.), *Poems of John Donne* (*The Muse Library*) (2 Vols.). London: Lawrence & Bullen, 1896

Cary, John(ed.), *John Donne* (*The Oxford Authors*), Oxford: O.U.P., 1990

Craik, T.W. & R.J.(ed.), *John Donne, Selected Poetry and Prose* (*Methuen•English•Text*). London: Methuen, 1986

Grierson, H.(ed.), *Donne, Poetical works* (*OSA*). Oxford: O.U.P., 1933

Patrides, C. A.(ed.), *The Complete English Poems of John Donne* (*Everyman Library*). London and Melborne: Dent, 1985

Sanders, Wilbur, *John Donne's Poetry*. Oxford: O.U.P., 1971

Shawcross, John T. (ed.), *The Complete Poetry of John Donne*(*Anchor Seventeenth Century Series*). Garden City, New York: Doubleday, 1967

Smith, A. J.(ed.), *John Donne, The Complete English Poems* (*Penguin English Poets*). London: Allen Lane, 1974

Gardner, Helen(ed.), *John Donne, The Divine Poems*, Oxford: O.U.P., 1952

Simpson, Evelyn M.(ed.), *Essays in Divinity by John Donne*, Oxford: O.U.P., 1952

Potter, G. R. & Simpson, E. M.(ed.), *The Sermons of John Donne* (10 Vols.). Barkley: Univ. of California P., 1953

Simpson, E. M.(chosen), Gardner, H. & Healy T.(ed.), *John Donne, Selected Prose*. Oxford: O.U.P., 1967

Reeves, Gareth(ed.), *Selected Poems of George Herbert*. London: Heinemann, 1971
ハーバートの詩の引用はこのテクストによる。

参考文献

The Holy Bible, NewYork: American Bible Society

Anghterson, K.(ed.), *The English Renaissance. An Anthology of Sources and Documents*. New York: Routledge, 1998

Barlow, William, *The Conference at Hampton Court January 14. 1603*(*The English Experience* 711). Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc., 1975 (*The Summe and Substance of the Conference*, London: Printed by John Windet, 1604)

Gef, Henry & Hardy, W. J., *Documents Illustrative of English Church History*. Macmillam, 1910

Cary, J., *John Donne, Life, Mind, & Art*. London: Faber and Faber, 1981

Bald, R. C., *John Donne, A Life*. Oxford: O.U.P., 1970

Gosse, Edmund, *The Life and Letters of John Donne, Dean of St.Paul's* (2Vols.). Gloucester, Mass: Peter Smith, 1959

Walton, Izaak, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson* (*The World's Cassics*). London: O.U.P., 1936 (初版 1670)

Hughes, Richard E., *The Progress of the Soul: The Interior Career of John Donne*. New York: William Morrow, 1968

Johnson, Jeffrey(ed.), *The Theology of John Donne(Studies of Renaissance Literature)*, Cambridge: D. S. Brewer, 1999

Kahn, Victoria, *Rhetoric, Prudence, and Skepticism in the Renaissance.* London: Cornell U.P., 1985

Lieshman, J. B., *The Monarch of Wit.* London: Hutchinson's House. 1951

Norbrook, David, *Writing the English Republic.* Cambridge U.P., 1999

Oliver, P. M., *Donne's Religious Writing, A Discourse of Feigned Devotion (Longman Medieval and Renaissance Library).* London: Longman, 1997

Young, R. V., *Doctrine and Devotion in 17th-Century Poetry (Studies in Renaissance Literature).* Cambridge: D. S. Brewer, 2000

湯浅信之（訳）『ジョン・ダン全詩集』名古屋: 名古屋大学出版局, 1996

川崎寿彦『ダンの世界』東京: 研究社出版, 1967

西山良雄『憂鬱の時代』東京: 松柏社, 1990

吉田幸子『ジョン・ダンの異端と正統』東京: 英宝社, 2000

（2000年９月11日受理）

（おかむら　まきこ　文学部教授）